僕は水滴だ。

亜紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は水滴だ。

【Ｎコード】
Ｎ０５５２Ｃ

【作者名】
亜紋

【あらすじ】
学校で話し掛けられた女性を信じてしまう。

僕は水滴

水滴を見ていると思った。
似ている、水滴と生き方が似ていた。
水滴がついている葉は、いつもより綺麗に見える。
そして、いつの間にかなくなり誰もきずかない。
俺も同じ、醜い俺がいるから美しい人がよりいっそうに輝く。
俺がいなくなっても誰もきずかない、俺を一部の風景としか見ていない。
当然教室でも一人だ。
窓の外に木が見えてそこの葉に水滴がついていた。
その水滴をずーと見ていた。
いきなり体に冷たいものが触れた。
俺は慌てて逃げた。
振り返ると女性が立っていた。

「すまんな、驚かせるつもりは無かっやけどな」

「そう、で何のよう」

「毎日外見てるから気になもうて」

「それだけ」

「うん、そうなんよ、すまんな」

「別にいいけど、誤らないで欲しいな」

「あ、ほんまに」

「後そんな話し方やめてくれない」
「うち、普通やねんけど」
俺はこんな女性を見たことが無かった。
「のんきそうだな」
「そうみえる？」
「あぁ」
「そうかいな、それはしゃないな」
「そろそろ行かないと遅刻だぞ」
「ほんとやね、次移動やったね」
俺は次の教室まで向かった。
さっきの女性の名前は河原美紗（かわはら みさ）クラスでも地味なやつだった。
誰かに話すなんてほとんど見たことが無い。
チャイムが鳴り教室に戻るとまた美紗が話し掛けてきた。
「うちと一緒にどうえ？」
「いいけど、何で？」
「いつも一人やから、うちもあなたもね」

美紗はいつのまにか友達のような話し方になっていた。
俺はコンビニで買ったパンとコーヒーを取り出した。
買いに行くのが面倒でいつも買ってきている。
人気のない昼の屋上に行った。
普段入ってはいけない場所だが昼になると必ずここに来る。
昼寝がここでは気持ちがいいのだ。

「ここって入ったらあかんのと違うん？」

「たぶんダメだ、でも見つからんからいいんだよ、来たくなかったら、来なくてもいいが」

「嫌だ行きたいんよ」

「あっそ」

本当について来たから聞いて見た。

「何で、そこまで俺にかかわるんだ」

「友達やから、初めての」

「はぁ、初めてなんでなんだ」

「体が弱くて学校に来れなかったんよ」

「今は大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫やな体育はまだ無理やけど」

「そういえば、友達にいつなった、俺ら」

「わからんよ」

「そうですか」

それ以外返す言葉が無かった。
俺は横になると寝る体制になった。
昼を食べるといつもここで寝る習慣だった。

「寝るん？」

「すまんな、忘れてた」

「ううんいいよ、寝よっか二人でぇ」

「あんたも寝んの？」

「うん、ここ影ができて風も通って気持ちよさそうやねんもん」

「その言葉体が弱いやつの言葉じゃあないぞ」

「気にしない、外で寝るの初めてやわ」

「・・・・・」

「なに黙っているんの？」

「俺がなにかするとか考えないのか？」

「そっか、男の子やもんね、でもやらないでしょう」

「まいっか」

俺は面倒だと思った。
昼休みの間寝ているとふと目が覚めた。
美紗は隣で寝ていた。
丸く小さくなって寝ていた。
スカートがめくれて見えそうになっていた。
寝顔がすごくかわいく見とれていた。
時間も迫ってきたから美紗を起こすことにした。

「そろそろ授業始まるぞ」

「ほんとや、でもほんとに何もしなかっやね」

「・・・・・・・・・」

「私の寝顔ずーと見てたやろ？」

「え、起きてたのか」

「ほんまに、うそついてやけやのに」

「え、キツイは今の嘘、恥ずかしいな」

そんなこと話しているとチャイムが鳴った。

「もう遅刻や、まぁいいか」

「そうやね」

ふたりは今日一日でかなりの距離を縮めた。
次の日は学校に小説を持っていった。
学校で呼んでいると、美紗が「なに読んでるの？」と聞いてきた。

「家族狩り」

「面白い？」

「読むか？、俺呼んだし」

「違うねん、私読んだことあるから、面白かったし、やから気になってぇ」

「そう、面白いよ」

「そうかぁ、気が合うとこまたひとつ見つけたなぁ」

そういうと美紗は楽しそうに笑った。
教師が教室に入ってきた。
慌てて美紗は席に戻り座った、チャイムはすでに鳴っていた。
慌てた姿もかわいく思えてしまった。
昼は必ず屋上に行き、ふたりで食べた。
そして雑談や寝るなどしかしなかった。

ふたりの距離

学校では物足りなくなったのか美紗が「家に遊びに行っていいかぁ？」などと聞いてきた。

「あぁ」

この言葉には自分が一番びっくりした。
いつのまにか美紗を友達と認めているからだ。
そして美紗は学校から直接家に来た。
親はいない、俺が自分の家が欲しいというとここに住むよう言われた。
ありがたいが、愛情なんか感じないいままここに来た。
家はそれほど広くなく一人ではちょうどよかった。

「ここに住んどるん？」

「あぁ」

「何も無いんやね」

「別にいらないから」

「でも本ばかりはあるね」

「好きだからな」

そんなことばかり言う美紗がその辺歩き回った。
俺はコーヒーを入れてやった。

「でも親とかいいひんの」
「あぁ、まだ言ってなかったな、一人暮らし」
「大変やな？」
「別に、親から毎月金は入るから」
「そうなんや、私ここに泊まってえぇ？」
「何で、家があるだろ」
「家にあまり帰りたくないんよ」
あまりに淋しい顔になったから断れなかった。
「仕方ないなでも、親からの了解もらってからだからな」
「うん、ありがとう優しいやねぇ」
美紗がそういうといきなり親からの了解をもらった。
その夜俺はバイトが入っていた。
そのことを美紗に言うと。
「そんなんや、すまんね」
「別にいいよ」
「でもなんでバイトなんかしてはるん？」

「親からもらうのは少し気が引けてほんとにきつい時しか使わない」
「えらいやね」
「うるさい、えらいんじゃなくて当然なの」
そういうとバイトに行った。
7時から始まり12時頃に帰ることを美紗に話した。
バイトが終わり家に入るといい香りがした。
中では美紗が料理を作ってくれていた。
「お帰り、ご飯作ってみましたー」
「ありがとう」
「どういたしましてぇ、さぁどうぞ」
渡されたご飯を受け取って、椅子に座った。
初めての気持ちで戸惑いが隠せなかった。
自然と美紗のことが信頼できる友人になった。
ご飯を食べ終えた。
「うまかったし、久しぶりに普通のご飯食べたよ」
「やーうれしいわ、またゆくったるさけぇ」
「料理できたんだな、人は見かけによらないな」
「失礼やわ、私だって料理くらいできるぇ、以外なのは裕樹(ゆうき)やよ、

学校とは全然違うんやもんそっちのほうが驚きやね」

「そんなに違うか」

「うん」

「まぁいいか」

美紗を俺の部屋に連れて行きそこで寝るように言った。
他の部屋に行き布団を出した、無駄に布団だけ持っていた。
俺の部屋はベットになっていた。
寝ていると、ふと美紗との近すぎる心の距離にきずいた。
ここまで人を信じたことも無い、何もかもが不思議で考えられないことだった。
翌朝目が覚めるとまたもや美紗がご飯を作っていた。

「ありがとう、今日も作ってくれるなんて思わなかった」

「ご飯ぐらいいつでも作ったあげるぇ」

こんな生活がこのまま続けばいいと思っていた。
学校にもふたりで登校した。
今日も一日の授業終わり、美紗がまた俺の家に泊まりに来た。
俺も了解をえれるのならいつでも一緒にいたかった。
美紗は家に帰らずここに毎日泊まるようになった。
登校も一緒なのか学校で噂になった。
付き合ってると。

裏切りの恐さ

突然美紗が嘘をついた。
その嘘はあまりにも小さいことだが、俺の心に深く傷をつけた。
初めて信頼した相手それが美紗だ、その美紗が小さなことで嘘をついた。
親に連絡をいれずにここに泊まっていることだ。
美紗の親はいつものことのようにしていて体が弱いのも嘘、そんなこと俺にとってはどうでもよかった。
問題はその嘘をなぜついたか、内容は関係ない小さな嘘ほど大きい裏切りは無い。
その場の冗談ならまだしもそれでもない。
初めて信頼したのが美紗だった。
親も信用できない俺は本当は人が恐くて何のかも全てから逃げ出していた。
そんなときに学校で初めて声をかけてくれたのが美紗だった。
信頼しきったわけではないが信じていた。
そして嘘をつかれた。
信用という壁が作られない内から嘘という攻撃に耐えられずつぶれてしまった、心という土台と一緒に。
美紗はこのことについて、まだきずいていない。
言ってしまったほうがいいのかもまだわからないでいる。
俺は美紗の中にいないでは無いのか、聞いてしまうとそれがわかってしまう。
それが恐い。
もし美紗の心に俺がいなかったら、ここから先誰も信じることができない気がした。
でもこのままだと前に進めない、ただ立ち止まるだけ動かないと何も始まらない。

自分ではわかっていてもできない自分に腹を立てながら今を過ごしている。
心が痛い、治すことも知っている、でも失敗するともっと痛い。
涙がこぼれてきた。
この家も、今の俺にとっては悲しい家でしかなかった。
居場所の無い自分の家、それほどに楽しかった毎日が、今は悲しい場所。
突然変わる世界がこんなにも絶えられなくなるものになるなんて想像もつかなかった。
その日学校は休んで外に出た。
周りのやつらにも裏切りの心があるやつにしか見えなかった。
裏切りは全ての人間の心の中にある。
いつどんなときに出てくるかはその人しだい。
俺の心の中にもあり、周りのやつらもある、こいつら全て裏切りという悪に声を傾けたことがあるはずだ。
そんなことばかり考えていると意識が無くなった。
目が覚めると、みていた光景と違う景色、周りはいろいろの花が綺麗に咲いている。
俺以外に誰もいない、そして声が聞こえてきた。
周りを見渡しても誰もいない、でも確かに聞こえた声。

「よぉ、元気か、さっきから俺を探しても意味無いぜ」

「どこにいる」

「うるさいね、あんたの心の中だよ」

「お前はいったい誰なんだ」

「俺か、俺は君、君は僕一心同体だから」

「何を言ってるんだ」

「仕方ないな姿みしてやるよ、後ろ見てみな」

そのとき俺は自分の目を疑った。
そこには俺が立っていた。

「どうした、望みどうり出てきてやったぞ」

「どうして」

「さっきも言っただろ、君は僕だ、生きている奴には誰でもふたりの自分がいる、つまり天使と悪魔だ」

「今の俺はどっちなんだ」

「そんなもん誰にもわからない」

「何で、何でなんだよ」

「誰だって自分を理解し続けることはできない、それが事実だからな、もう時間だ何も言えなかったが後は自分で考えな」

そこで夢から覚めた。
俺は涙が出た。
事実そうだったからだ。
俺は自分のことがまったくわからない。
もしかしたら美紗も自分自身がわからなく、それがわかったとき俺が離れてしまうかも知れないだから恐くて嘘をついたと思う、自分

のこともろくにわからないのに、美紗のことまでわからない。
でもそう思う。
俺は言葉だけで信じきっていなかった。
だから美紗も俺を信じろことができなかったに違いない。
少しでも美紗のこと信じていなかったことにたいして恥さえも感じた。
俺と美紗が苦しくなるのも、悲しくなるのも、嘘をつくのも全部お互いに信じきれていない証拠だともいえるに違いない。
止まらない涙、何時間たっても止まらない。
後悔が流れているみたいだった。
俺は自分を恨んだ。

自分にの心の弱さをうらんだ。

信じるという本当の意味を知った。

軽く口に出してしまうけれど、すごく重たくて大切な言葉。
自分に嘘をついていた時の辛さも学んだ。

本当はみんなも恐さと戦っている。
辛すぎて絶えられなくなったら、すぐに逃げ出せばいい。
自分にとって大切な人が助けてくれる。
でも自分を甘やかしてしまうとそれが、戦わない理由になってしまう。

傷ついてしまうと元には戻らない、で逃げてしまうと戻ることもできない。

自分に後悔の無いように生きないとやがて人は死を考えるだろう。

死は何も無い、最後に逃げる場所でもないいんだ。

だから生きるもの全ては戦う。

人の生きる目的はそれぞれ違うけれどみんな戦う。
生きる目的のために、目的が無い人は重大な何かを抱えているだからい、今は見つからない、きっといつかは見つかる、そしてそのために戦う。

僕は水滴だ。

水滴でも集まれば生きているものにかけがえの無い存在となる。

だから戦い、いい結果をだそうと努力する。
逃げてもいい結果が出る。
後は自分がいつ逃げるのかの調整だけすればいい。
俺も今から戦いが始まる。

生きていて、楽しくないのは逃げつづけている証拠、戦いてきどに逃げれば生きるのも悪くない。

さぁ、目的が決まれば物語の始まりだ。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0552c/

僕は水滴だ。

2010年12月14日02時59分発行